

第2節 庵原氏の動向

前述してきたように庵原城は判然としないものの、庵原氏により構築された城から、朝比奈信置により大きく改修された可能性を示した。また遺物も15世紀代が主体で、16世紀代の遺物は皆無と言ってよいだろう。すでに指摘されているが、出土遺物と遺構との乖離がある。そこで15世紀代以降の庵原氏の動向を概観しておく必要がある。第7表は系図以外の古記録から抽出した庵原（廬原・五百原・菴原）姓を名乗る人物の集成、編年を試みた表である。庵原氏には廬原氏は吉備武彦の子、意加部彦の後裔を称した者や越智氏の後裔と称した者、藤原南家の後裔、坂上田村麻呂の後裔等、幾つもの系統が存在したことが知られている。従って第7表に掲載された庵原姓を名乗る人物はこれら複数の血脈にわたる人々である。当該報告書が対象とする庵原氏は藤原秀郷の後裔と称したとする系統であろう。

15世紀初めに見られる庵原氏の動きは、庵原英盛の軍事行動が記録に残る。応永23年（1416）に勃発した上杉禅秀の乱に伴い、英盛は兵500人を率い鎌倉公方足利持氏に加勢したとする。この際、上杉軍が駿河国に乱入し、入江付近で合戦を繰り広げている。また、永享5年（1433）に今川氏の内訌で庵原氏の名が度々室町幕府要人の記録に登場する。京から下向した今川彦五郎（範忠）の軍と反発する国人衆（狩野氏・富士氏等）の軍勢が各所で戦闘を繰り広げている。「管領細川持之書状写」の宛先には「庵原周防入道」とあり、反彦五郎派の富士氏・狩野氏と同じ内容の書状が送られている。ただし、敗れた富士氏・狩野氏等が室町幕府に詫言をいれた記録が残るが、庵原氏がその記録が無い。応仁元年（1467）には応仁の乱により、今川軍の一翼として庵原氏は上洛している。後の文明12年（1480）に太田道灌と庵原民部入道との交流が記録されているが、時代的に応仁の乱で上洛したのは民部入道であった可能性はあろう。また、文明8年（1487）に遠江国横地氏・勝間田氏への攻勢で今川義忠が戦死、その後継を巡り今川氏一門、由比氏や庵原氏が合戦を繰り広げている。

以上のように、庵原氏は15世紀代において4回もの緊張状態を経験していることになる。この庵原氏が有事の際の拠点の構築について全く関心を払わなかったとは考えにくく、庵原城の築城についてはこの時期に遡る蓋然性は否定できない。とは言え、約100年の間に4回もの戦役を経験し、庵原氏の財政状況は疲弊したものが見え、明応年間（1492～1500）にそれまでの忠勤の報償であろうか、庵原氏の債務を今川氏が肩代わりする事態に至っている。よって、この度調査された遺構を形作るほど、大規模な築城を行っていたとは考えにくく、仮に築城を行っていたとしても丘陵尾根頂部の平坦にした程度の簡単な構えだったのではないか。

16世紀、この庵原氏が疲弊していた時期に、後に今川義元の軍師にもなった太源崇孚雪斎は庵原世順良朝庵主と興津氏女との間に生れている。永正12年（1515）に勃発した甲斐国守護武田信虎と国人大井信達の抗争の際に、庵原氏は今川軍の一翼として翌年（1516）甲斐国へ出兵する（第1回目）。万力の合戦では武田軍に大勝利をおさめているが、永正14年（1517）に今川方の吉田城（山梨県富士吉田市）が落城し、今川氏・武田氏の和睦が成立した。永正18年（大永元年：1521）9月には今川氏重臣の福島氏が軍勢を率いて、再度甲斐国に侵攻（第2回目）するも、10月の飯田河原（山梨県甲府市）の合戦、11月の上条河原（山梨県甲斐市）の合戦で、今川軍は大敗している。第1回目の甲斐国侵攻については庵原氏の参加が記録されているが、第2回目の侵攻は重臣福島氏が大將となったもので、庵原氏も参加したのかどうかは記録に無い。しかし大永5年（1525）に庵原安房守が債務返済に窮し、今川氏に救済を求める事態が発生している。永正13年からの甲斐国出兵に際して軍費調達で借財が累積したことによるものと解釈するむきもある。この時の庵原安房守は年代からも雪斎の兄弟であると推定してよい。その後、天文5年（1536）に今川氏輝急死を受けて家督承継につき内戦（花蔵の乱）が勃発。記録には残っ



第33図 永禄11年の武田軍侵攻

ていないものの、隣接する興津氏が義元側に付き、また庵原氏出身の雪斎と今川義元との関係からして、庵原氏は重臣としても関与せざるを得なかったと考えられる。天文6年（1537）、花蔵の乱により反義元派が鎮圧された後、敵対関係にあった武田氏との同盟関係が成立した直後、2月に北条氏が今川領だった富士川以東の地へ侵攻（河東一乱）する。北条軍は一時、興津まで進出し、焼き打ちを行っている。小泉（富士宮市）では富士氏が抗戦、また吉原（富士市）でも富士下方衆が北条軍と戦闘を行っている。混戦状態は武田氏の調停により天文14年（1545）に収束している。この際に雪斎の交渉活動が功を奏したものとされる。翌年、天文15年（1546）、武田晴信に召し抱えられた山本勘介（晴幸）が庵原氏に挨拶に出向いている。山本勘介は武田信玄の軍師として後世に伝えられる人物であるが、詳細が判然としない人物で、実在を疑う説も存在する。山本勘介の母は庵原世順良朝庵主と兄妹ともされ、雪斎とは従弟

第7表 廬原氏・庵原氏関連年表(稿)

時 代	出	来	事	出 典 文 献 名
天智天皇 2年	663	百濟王が諸將に廬原君臣が健児を率いて、救援にくることを告げる。		『日本書紀』天智天皇 2年 8月 甲午条
和銅 3年～ 霊龜 3年	710～ 717	平安京左京三条二坊S D4750出土木簡(長屋王家木簡)に「廬原務志麻」と書かれた木簡が出土している。		奈良国立文化財研究所1995 『平城京木簡 1 - 長屋王家木簡 1 - 解説』
神龜 2年	725	聖武天皇が征夷将軍以下約1600人に勲位を与える。五百原君由麻呂等には勲六等、田二町を与えた。		『続日本紀』巻九閏正月丁未条
天平 9年	737	駿河国が朝集維使として廬原君足磯等を遣わす。		『駿河国正税帳』
神護景雲 3年	769	下正六位下、菟原郡大領であった廬原公首麻呂が駿河国造に任ぜられる。		『菟原公系図』
寶龜 3年	772	五百原豊成に菟毛筆の直として新銭を支給される。		『奉写一切経所銭用帳』
寶龜 3年	772	五百原豊成に墨一丁を支給されるが、後に返上する。		『奉写一切経所銭用帳』
延暦13年	794	菟原公広道ら兄弟 4名、右京七条に貫附される。		『菟原公系図』
承和 2年	835	廬原公有守、遣唐譯語に任命される。		『続日本後紀』承和 2年10月丁丑条
承和 2年	835	廬原柏守(兄)、廬原公有守(弟)が朝臣姓を賜る。		『続日本後紀』承和 2年10月丁亥条
天慶 3年	940	平将門鎮圧のために征東軍が組織され、駿河国の在庁官人であった菟原広統(ひろもと)も参加。		『真信公記』
正治 2年	1200	廬原小次郎ら駿河国人衆が、梶原景時一行を討ち取る。		『吾妻鏡』巻十六
正治 2年	1200	廬原小次郎ら駿河国人衆が鎌倉に参着し、梶原景時一行との合戦記録を提出する。		『吾妻鏡』巻十六
承久 3年	1221	承久の乱勃発、幕府軍の庵原仲次が宇治川橋の戦いで負傷。		『吾妻鏡』巻二十五
建長 2年	1250	幕府が廬原左衛門入道を含む御家人に閑院殿造管役をわりあてる。		『吾妻鏡』第四十
観応 2年	1351年	庵原氏等が足利尊氏陣営に参加、平沢付近で入江駿州・三澤小次郎と交戦。		『太平記』
延文 4年	1359	良増禅門(庵原氏一族か)が死去		一乗寺境内五輪塔銘文
応永23年	1416	上杉禪秀の挙兵により、鎌倉公方足利持氏は駿河に逃亡。持氏に駿河国目代庵原蔵人英盛が最初に合力する。		『続太平記』12
永享 5年	1433	庵原氏が今川千代秋丸に関東方が合力している風聞を注進する。		『満濟准后日記』
永享 5年	1433	駿河国の国人に管領奉書が下される。その宛名の中に庵原周防入道の名が見られる。		『管領細川持之書状写』
永享 6年	1434	駿河国守護今川範忠や庵原氏等の国人から満濟のもとに、足利持氏の動きを注進(永享の乱へ)。		『満濟准后日記』
応仁元年	1467	応仁の乱勃発。今川義忠は庵原氏を含む国人衆を率いて上洛。		『今川記』第 4
文明12年	1480	沖津(興津)の宿に滞在中の太田道灌のもとに、庵原民部入道禅道が来訪。		太田道灌『平安紀行』
文明 8年	1487	今川義忠の葬儀後に、今川一門、庵原氏を含む国人等が合戦。		『今川記』第 4
明応 5年	1496	太原孚歩雪斎生まれる。父は庵原氏、母は興津氏の女とされる。		遺偈
明応年間	1492～ 1500	今川氏料所の焼津郷の年貢を、庵原周防守の債務返還に充てる。		今川かな目録第二十条
永正元年	1504	庵原世順良朝庵主(太原孚歩雪斎の父)死去。		「駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香語」
永正13年	1516	甲斐国の国人大井氏の要請により、今川氏親が葛山氏・庵原氏・福島氏等の重臣を動員し、甲斐国へ侵攻。甲斐国勝山城を拠点とする。		『今川家譜』『今川記』
大永 3年	1523	九英承菊(後の太原孚歩雪斎)が駿河国富士郡善得寺において、方菊丸(後の今川義元)を指導する。		
大永 5年	1525	庵原安房守が借金返済に窮し、今川氏に救済を求める。		今川かな目録第二十条
大永 6年	1526	庵原周防守「欠け落ち」所有権		今川かな目録
天文13年	1544	京都妙心寺大休宗休(だいきゅうそうきゅう)により雪斎の父、庵原世順良朝(せいじゅんりょうちょう)庵主の40年忌の仏事が行われる。		「駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香語」
天文15年	1546	武田晴信に召し抱えられた山本勘介が庵原氏に挨拶に出向く。		『甲陽軍鑑』品第廿六
天文19年	1545	今川義元が武田晴信へ庵原弥兵衛等を使者として遣わす。		『甲陽軍鑑』品第廿九
天文20年	1551	駿河国大平郷の八社神宮が退転(荒廃)していると、沼津領奉行の庵原新三(新三郎)が今川義元に訴える。		『大平年代記』
天文21年	1552	朝比奈丹波守が吟味し、八社神宮は不退転である旨、今川義元に報告。庵原新三(新三郎)が役替えになる。		『大平年代記』
弘治元年	1555	太原崇孚雪斎(たいげんそうふせっさい)葉梨長慶寺にて死去。		「太原崇孚頂相贊」
弘治 2年	1556	山科言継のもとに中御門宣綱の使者である庵原左衛門尉と会う。		『言継卿記』
弘治 2年	1556	山科言継が庵原左衛門尉のもとに使者を遣わし、酒を勧められる。		『言継卿記』
弘治 2年	1556	山科言継が庵原左衛門尉のもとに使者を遣わし、晩餐をご馳走される。		『言継卿記』
弘治 2年以降	1556～	『駿河国臨濟寺塔頭・末寺帳』には一乗寺を「…是は庵原左衛門私領の内庵に候…」、清見寺塔頭竜沢庵を「…庵原檀那にて候…」と記載。		『駿河国臨濟寺塔頭・末寺帳』
永禄 3年	1560	庵原左衛門佐元景が三河国岡崎城に詰める。		『信長公記』
永禄 3年	1560	尾張国へ攻勢中、桶狭間の戦いで今川義元討ち死。敗走する今川軍に織田軍が追撃戦。庵原左近大夫・同姓庄二郎等の多くの今川重臣も討ち死。		『家忠日記増補追加』
永禄 3年	1560	庵原将監忠縁、庵原左近忠春、庵原彦次郎忠良、庵原美作守元政(旗奉行)等討ち死。		『信長公記』
永禄11年	1568	武田信玄、駿河国へ侵攻するため甲府を進発。降者の庵原弥兵衛を案内者とする。		『甲陽軍鑑』
永禄11年	1568	武田軍駿河国へ侵攻。内房に布陣。庵原氏は先陣として薩埵山に布陣するも、武田側に内応する家臣続出し、庵原氏撤退。		『武徳編年集成』『甲陽軍鑑』
永禄11年	1568	庵原弥兵衛が武田信玄に久能山が堅固な地勢であることを答申。		『甲陽軍鑑』
永禄12年	1569	武田信玄が朝比奈駿河守に庵原氏の旧知行地一円を与える。		「武田晴信書状写」
永禄12年	1569	一乗寺が朝比奈信置により庵原氏内庵に移される。朝比奈氏出身の哉翁宗咄を招じて曹洞宗寺院となる。		『一乗寺史』
永禄12年～	1569～	武田家による駿河支配に際して駿河先方衆を編成。その中に庵原弥右衛門の名がある。		『甲陽軍鑑』品第十七
永禄12年～	1569～	駿河先方衆筆頭朝比奈駿河守信置の同心衆に庵原傳内の名がある。		『甲陽軍鑑』品第十七
永禄～天文年間		駿河先方衆の庵原弥右衛門が改易。諷諭に護送される。		『甲陽軍鑑』品第三十七
天正 2年	1574	武田氏、庵原源一郎に領地安堵を行う。		「武田朱印状写」
天正 9年	1581	徳川軍、駿河国持船城へ攻勢。庵原傳内等が戦死。		『甲陽軍鑑』品第五十六
天正15年	1587	善得寺住持東谷宋果(とうこくそうこう)が駿河国善得寺飯屋で雪斎33回忌を執り行う。		「護国禅師雪斎遠諱香語写」

の関係となるのである。天文15年（1550）に、今川義元が庵原弥兵衛を使者として武田晴信のもとへ差し向けている。天文20～21年（1551～1552）に今川氏所領の沼津領の奉行職に庵原新三（郎？）なる人物が存在したことは、記録で明らかであるが、どの系統の庵原氏かは判然としない。ここまでの約半世紀、庵原氏は雪斎の活躍もあり今川氏の重臣としてようやく安定期を迎えつつも対外的な緊張状態は持続しており、小規模とはいえ城塞としての庵原城を維持する必要性は消えないのである。

16世紀後半以降、庵原氏は絶頂を迎えた今川氏と共に没落へ転がり始める。弘治元年（1555）に雪斎が死去する。弘治2年（1556）、京から下向した公家、山科言継と庵原左衛門尉との交流が『言継卿記』に明らかである。この時期、今川氏は遠江国から三河国へ勢力を既に伸ばしていた。永禄3年（1560）に忠胤の孫とされる庵原左衛門佐元景が三河国の岡崎城（愛知県岡崎市）に兵1000を以て入城している。この後の桶狭間の合戦で今川軍は壊滅、従軍していた忠胤の兄弟や旗奉行であった美作守元政が討死したとされる。義元亡き後、子息氏真の治世、永禄11年（1568）12月6日、武田信玄が軍を率いて駿河国へ侵攻（第一次）を開始する。第33図に信玄の侵攻推定ルートを示した。12月9日に戦鬪の火ぶたを切ったのは信玄の本隊とは別に、中道往還を經由した富士山西麓沿いに進んだ武田軍別動隊が富士信忠（富士浅間宮大宮司）の守備する大宮城に攻勢をかけている。この戦鬪で富士氏が防衛に成功、後に武田信玄の駿河国撤退の原因を作るのである。12月12日武田信玄の本隊は富士川沿い進み、今川軍を破った後、北松野から海沿いの由比に抜けている。一連の動きに合わせて、同日今川氏真は興津清見寺に本陣を構え、清見寺の先、興津川の東側に連なる薩埵山に庵原安房守が陣を構えた。しかしこの時既に武田氏が水面下で朝比奈氏、関口氏等に働きかけ、離反が相次ぎ迎撃態勢が崩壊、庵原安房守は氏真を擁して駿府館に退却している。12月13日武田軍は興津を占領。駿府へ進撃を開始している。この際に東海道沿いに進軍し、高橋城・北脇城を陥落せしめた隊と、有渡山北麓の上原を經由して進撃した隊に分かれて侵攻したという記述もある。前者は街道筋にあたる瀬名川を經由し、そのまま駿府館に乱入したものと考えられる。なお、相模国の北条氏は今川氏支援のため軍勢を仕立て、12月12日に今川方の蒲原城に入城、12月13日に武田軍の主力が駿府方面へ進出している間、武田軍の背後を襲うように興津へ攻撃をしかけている。この駿州錯乱とも呼ばれた一連の戦況で庵原氏は安房守のように忠実に今川氏につき従った者や武田氏側に付いた庵原氏も存在する。現在の久能山東照宮がある一帯が堅固な地で、城に適していると武田信玄に答申したのは庵原弥兵衛で、天文19年（1550）義元の使者として晴信（信玄）に面会した弥兵衛と同一人物であろうか。またこの武田氏が編成した駿河先方衆の中に庵原弥右衛門の名前が見られる。弥右衛門は庵原安房守忠胤の末弟と考えられている。また駿河先方衆筆頭朝比奈信置の配下に庵原傳内が、また庵原源一郎なる人物に対して武田氏が領地安堵を行っていることから、多くの庵原姓を持つ人物が武田氏の編成の中に組み込まれたのは明らかである。

以上のように庵原氏は武田氏の配下に下った後は、庵原城との関係は絶たれており、庵原城は旧庵原氏の所領一円を与えられた朝比奈信置の関与するものとなっている。前述したように件の庵原城は15世紀代の駿河国内の緊張状態を受けて築城された可能性は否定できないものの、窮乏状態の庵原氏が大規模な築造・修築を行えたとは考えにくく、その後、今川氏の急激な没落に際して、庵原氏によりいかほどの工夫がなされたかも全く分らない。その後、駿河国が武田氏の手の中に落ち、永禄12年（1569）以降、庵原氏の知行地が全て朝比奈信置の手に渡されてから、城が大規模に修築された可能性がある。これは武田氏が凋落・滅亡した天正10年（1581）までの約12年の間に改修が行われたことになるであろう。